「性的実存の尊重」は性暴力を肯定するか？

——性暴力とマゾヒズムの狭間から——

鎌 原 利 成

はじめに

現代社会における性の在り方は、様々な問題を孕みつつ、多様化、複雑化している。従来であれば、「倒錯的」とみなされたような性的実存の人の中にも、自らの存在を認め、社会の中で自己主張する人が現れている。また、売春について、「売春する権利」も主張されている。こうしたことは、ヘテロ・セクシュアル中心の伝統的性的規範、あるいは家父長的家族観の側からは、「嘆かわしいこと」として批判されている。一方、「性的自己決定論」の立場から、性に関する多様性を認め、他人を傷つけたり、迷惑をかけたりするのでない限り、それぞれの性的アイデンティティについての自己決定を認めようと主張されてもいる[1]。現在、性の問題については、このような形の論争が続いているところである。

このような論争で論点になることはたくさんあるだろうが、ここでは、「自虐的な性的実存、自虐的な性的関係性」についてどうとらえるかを問題にしてみたい。自虐的な性的実存、自虐的な性的関係性を生きる人は現にいるわけであるが、しかし、そうした人が皆、喜々としてそのような生き方をしているかとも言い切れない。やめたくても強迫的にそのような生き方をせずにはいられないという人もいるだろう。それについて、性的関係の一般的な規範、理想像から、「そんなことはやめろ」と言うのも押しつけにしか過ぎず、かえってその人をより傷つけることになるだろう。かといって、表面的な在り方だけを見て、「性的自己決定」の名のもとに「本人が自ら選んでいるから構わない」とするのが、本当にその人を尊重することになるのだろうか。前者は、ネガティブ・ラベリングをして、当

---

[1] 宮台真司は、自分を性的リベラリストの立場だとして、「他人の権利を侵害しなければ、どのような性的実存も肯定されるべきだ」（宮台、1999、13 頁）と言う。ところで、本稿では、性的自己決定の尊重ということと、性的実存の尊重ということを、ほぼ同じ意味で用いている。本稿における両者の意味のニュアンスの差を言うならば、前者は「意識的決定、選択」、後者は「どんな理屈を持ちだしてきても、個人にとってはどうしようもない」（宮台）（上野／宮台、154-155 頁）自己の存在レベルのことである。

事者を追い込みかねないし[2]、後者は、自虐的状況の容認、維持にしかならないこともあるだろう。「自分を傷つけてもよい」ということは、「自分を傷つけてもよいという人を傷つけてもよい」ということにつながる危険性がある。

そもそも自己決定といっても、性暴力や自虐的な性的関係性を再生産、反復させる言説、権力作用が働いている社会構造の中では、「自ら選んでいるから構わない」と言い切れないのではないか。近親姦、性的虐待、あるいは、ドメスティック・バイオレンスなどについて、被害者の方に性暴力を欲求するものがあるとか、被害者の人格にこそ原因があるというような言説があるが、それは加害を肯定し、被害者をますます追い込むことになる。あるいは、性的自己決定論に賛成した場合、「他人に迷惑をかけない、他人を傷つけない」という原則はあるが、サディスティックな性的実存の持ち主の自己決定はどうなるのか、それをどう尊重すればいいのかという問題は残る。「他人を実際に傷つけないように」その人の実存を満たすようにすればよいという言説もあるが[3]、どこまでが「他人が傷つかない」範囲なのかがはっきりしない。極端な話、子どもを性的対象にすることをも肯定しようという言説すらある。また実際、「傷つけられた」場合でも、その傷が軽く見積もられることがまだまだ多いだろう。

こうした問題を踏まえないと、性的自己決定といっても、単に、自虐的性的関係性を反復させ、性暴力を再生産する権力構造を維持することにしかならない。つまり、こうした問題を考えつつ、各自の性的実存を尊重することはいかなることかということを、改めて問わなければならないのである。本稿では、２つの事例を通じて、個々人の性的実存の尊重（了解）とは何かということを考えていく。ここでは、性の問題に焦点が当てられては

---

[2] 売春に関しても次のようなことが言われる。元セックスワーカーで、現役・元セックスワーカーのピア・カウンセリングをしている鈴木水南子は、ある性教育の現場で「売春すると人格崩壊します」という言葉を聞いて、ひどく傷ついたという。それは、「売春していたあなたは、実は人格が崩壊してしまっています」と宣告されたように感じられたからだという（鈴木、1997、8 頁）。「売春＝人格崩壊」とか、「売春することはプライドを売ることだ」というようなネガティブな解釈は、「「自らプライドまで売ったのだから何をされても仕方がない」という考えへとつながり、セックスワーカーに対する抑圧、差別、虐待を助長することになり……現状のままの性産業を維持したい人々に貢献することになるでしょう」（同、11 頁）と鈴木は語る。そして、セックスワーカーにネガティブなレッテルを与えるのではなく、「「行かないで。あなたは本当は大切な人なんだからね」と伝えてくれる大人がいてくれたら、こんなメッセージを決して諦めないで伝え続けてくれる大人がいたら、セックスワークを選択することはなかったかも知れません」（同、11 頁）と、セックスワーカーも大切な人間で、人権を尊重されなければならないと訴える。鈴木の言うように、肯定、信頼される暖かさの中でこそ、「本来の自分の知性が働きだし、理性的な自己決定、自己選択が力強くできる」（同、13 頁）のではないか。

[3] 宮台真司は、女性をレイプすることでしか自分の願望を充足できないというセクシュアリティをもっている者について、「彼らが、バーチャルな経験を通じてガス抜きできるチャンスがあれば、共生の原則に反しない」（宮台）（上野／宮台、155 頁）と言っている。

いるが、それは、普遍主義対個別主義、文化相対主義の問題、あるいは、近代性対ポスト・モダニティの問題にも通じるであろう。特に近代性の問題、そして、近代性をいかに超えうるかという問題については、本稿後半において、「近代性＝虚無的サディズム」というキーコンセプトのもと、論じられるであろう。

1　性的虐待の否認と性的虐待による心的外傷
――特に近親姦における支配と、それがもたらすもの――

本章では、性暴力、性的虐待、あるいは、自虐的性的関係性の反復、再生産につながる言説、心的外傷について述べる。特に、近親姦、性的虐待について言及し、力あるものから子どもへの性的虐待[4]においてすら、「被害者に非あり」とし、加害の容認につながるような言説があることを示す。そして、性的虐待の心的外傷によって、いかに自虐的性的関係性、あるいは性的被害が反復されるかを、事例を挙げて示したい。

1－1　フロイトの精神分析

近親姦、性的虐待の被害について早くに気づいていたのは、かのＳ．フロイトだと言わ

---

[4] 白波瀬丈一郎は、ガンザレインとビュークリによる外傷体験としての近親姦の定義を、『近親姦に別れを』の解題の中で引用している。そこには、「子どもは、性的虐待の加害者とセックスすることに対して同意を与えることが一体何を意味するのか、知りもしなければ理解もしていない。ということは、このような共通の行為において、犠牲者の側の同意というものは全く存在しない」（白波瀬、2000、132 頁）と書かれている。しかし、彼らは、犠牲者は確かに外傷神経症の典型的な症状に苦しんでいるが、犠牲者は単に受身的な犠牲者にとどまるだけの存在ではないとも言う。「近親姦体験のうちのいくつかには痛みは伴っていない。事実、ほとんどの近親姦状況には楽しい側面がある。特に、近親姦関係には愛と忠誠心とが含まれていることがある。加えて、臨床家にとっても患者にとっても認めがたいことだが、近親姦には相互的な満足があることがある」（ガンザレイン／ビュークリ、1988=2000、16 頁）。また、近親姦の犠牲者が家族に対して親役割を引き受けて家族の安定性をコントロールしたり、虐待者に同一化したりと、「自分たちのことを力があって、家族の統治者であるとも感じている部分」（同、47 頁）もあるという。しかし、近親姦の影響を低く見積もったり、加害を肯定的に捉えてよいというものではない。というのは、近親姦によってそうした受身的な犠牲者以外の面ももたらされてしまうことによって、自我の分裂、葛藤が起こり、それがまた苦しみにつながるからである。例えば、近親姦の性的体験において、心が嫌がっているのに身体が快感を感じてしまった場合など、被害者は、自分の身体を憎むようになり、身体と精神が分裂してしまったりする。あるいは、家族の中で親役割、支配的な役割を子供の頃から取ることは、大人的な自己と否認された子供としての自己の分裂をもたらす。「あくまでも近親姦の体験者は親の被害者、虐待の犠牲である」（小此木、2000、iv 頁）ということを踏まえ、被害によってこのような葛藤状態がもたらされることを知ることが重要である。本文第１章４節のサンドラ・Ｓの事例について、こうした葛藤についての理解がないと、「なぜ彼女が自虐的な関係を繰り返すか」という点がわからないだろう。

れる。フロイトは、1896 年に『ヒステリー病因論』を著したのであるが、そこには 18 のヒステリー症例（女性 12 人、男性 6 人）について、全員の患者に、抑圧された近親姦、性暴力の被害体験があることが、分析の中で明らかになったことが書かれている。そして、フロイトは、ヒステリーの症状について、ブロイラーの発見を糸口にして、次のように述べている。「ヒステリーの症状は（スティグマは別として）患者にとって外傷的作用をもった、ある種の体験によって決定されるのであって、症状が体験の回想象徴として患者の心的生活のなかに再現されているのだというのです」（フロイト、1896=1969、341 頁）と。心的外傷と、その再現が症状となって表れているということが、このようにはっきり書かれている。しかし、それが現実だとすると、性的虐待がブルジョア家庭にも広く蔓延しているということになる。それゆえに、フロイトにとって、子どもへの性的虐待の発見を受け入れるのは抵抗があっただろう。その後、フロイトは、自らの発見を信じられず否認するようになり、幼少期の性的虐待被害について、それは実際にはなかったものであり、子どものファンタジーに過ぎないと見なすようになっていったのである[5]。幼児は異性の親に対して性的愛着を抱き、近親姦的空想をするのだ（エディプス・コンプレックス）とされ

---

[5] この転回について、フロイトは次のように語る。「わたしは、わたしがしばらくの間おちいっていたところの誤謬であり、またわたしの仕事全体について禍となったと思われる誤りについてのべておかなければならない。その当時のわたしの技術的な操作の圧力の下におかれて、わたしの患者の大部分のものは成人によってなされた性的な誘惑を内容とする小児期における光景を再現したのであった。女性の場合には誘惑者の役割はいつも父親に帰せられたのであった。わたしはこの報告に信をおいた。そして、この児童期における性的誘惑の体験こそ後来のノイローゼの源泉が見いだされたのだと仮定したのであった。……しかし、後になって、このような誘惑の光景などは、決して現実にあったものではなく、わたしの患者たちが創作した、あるいはわたしが彼らに無理じいして創作させさえしたところの空想にすぎないということを認識せざるを得なかった……」（フロイト、1925=1969、44-45 頁）と。フロイトは、近親姦のみでなく、親からの身体的虐待についても同様に捉えている。子供は親から叩かれる幻想を語りたがるのだと（フロイト、1911=1984）。

フロイトの転回について、ガンザレインとビュークリは、フロイトが完全に「誘惑説」（子供が親等から性的体験へと実際に誘惑される）を捨て去ったのではなく*、「現実の近親姦と近親姦空想とは決して相互に排除し合うものではない」（ガンザレイン／ビュークリ、1988=2000、15 頁）と考える。確かに、転回後もフロイトが事実としての近親姦による影響を述べた部分はある。それでも、フロイトの転回以降、外傷体験についての研究が「精神分析においては、内的欲動・幻想説の陰に隠れてしまった」（白波瀬、2000、128 頁）というのは否定できない。かといって、内的欲動、幻想説について、――その内容自体については検討が必要であろうが――全否定できるかなどと、私はここで判断することはできないし、逆に主体の内的な精神の力動について何の理解もなくて心的外傷について論じることはできないだろうと思う。それでも、J．ハーマンやA．ミラーなど、フェミニズムの立場から示された近親姦、その外傷の実際について明らかにされたことを謙虚に受け止めなければならないと考える。

*「女性の性愛」（1931）においてフロイトは次のように述べる。「実際に誘惑がなされるのもかなりしばしばあることだし、それは他の小児たちからやってくるか、またはその世話をしてやる人物が小児をなだめようとか、眠らせようとか、自分の意のままにしようとかすることからくるのである。誘惑がはたらくところでは、それはきまって発達過程の自然な経過をさまたげる。それがのちのちまでも引きつづき持続するような結果を残すこともしばしばなのである。」（フロイト、1931=1969、146 頁）

た。更に、親などとの実際の近親姦の場合に、子どもの方が誘惑したのだという見方もされたりと、問題は、子供の幻想、幼児性欲の方にあるのだとされるようになったのである[6]。

１－２　児童虐待、性的虐待被害の告発に対するバックラッシュ

再び女性の性的被害等が問題にされるようになったのは、1970 年代に女性解放運動が興ってからである。アメリカでの「コンシャスネス・レイジング（意識向上）運動」におけるグループでの語り合いによって、それまで否定されていた被害の真実が、互いに信じ分かち合えるようになっていった。社会の変革を目指す、そうした女性運動の影響で、性的攻撃についての研究が増加し、1975 年にはアメリカの国立精神保健研究所におけるレイプ・リサーチセンターが設立されるた（ハーマン、1992＝1996、38-41 頁）。こうして、性的虐待、性暴力が、非常に広く浸透したものだということが明らかになっていった。そうしてフェミニスト達は、レイプについて「性行為の一種ではなく、暴力犯罪の一種」と定義を改め、更にそれを、「恐怖をとおして女性の従属を強いる政治的手段」「男権維持の手段」規定するようになってきた（同、41-42 頁）。そして、レイプについての研究において、赤の他人による「ストリート・レイプ」から、知人によるレイプ、デイトにおけるレイプ、結婚生活におけるレイプに注目されるようになってきた。また、成人女性に対するレイプから、小児に対するレイプにも視野が広がっていったのである（同、43 頁）。

また、レイプについての研究は、その被害による症状も発見していった。1970 年代、レイプ被害者に一定のパターン――睡眠障害、吐き気、解離症候群など――があることが発見され、それは「レイプ・トラウマ症候群」と呼ばれるようになった。1980 年代に入ると、それが戦争による「外傷後ストレス障害」と本質的に同一の心理学的反応であることがわかったのである。

こうして、アメリカで――1980 年代になって――近親姦、性的虐待の問題が大きく取り上げられるようになって、それが中・上流階級にも起こっているという認識が広がると、それに対するバックラッシュが起こるようになってきた。児童虐待の通報を徹底化させる政策が広がってきたことで、児童虐待の通報件数が増えすぎ、実証されない通報も増大していった。そこで、性的虐待の加害の容疑にかけられた人による告発が起こるようになり、

---

[6] 「精神分析運動史」（1914）の中で、フロイトは、ヒステリー患者の語る幼い頃の性的体験を嘘の空想だと述べる。しかも、実際の性的な外傷体験について、「子供の性的体質の特性こそは、特殊な性的体験を、すなわち外傷を挑発することを心得ている」（フロイト、1914=1983、266 頁）というアーブラハムの説（1907）こそが、外傷的因果論の問題について最後の断を下したのだと述べている。

1984年には「子どもへの虐待取締り法被害者の会（Victims of Child Abuse Laws=VOCAL）」[7]が結成された。

また、性的虐待の被害者は、解離性の健忘などで、被害の事実を、被害の後何年も経ってから治療中に思い出すということがある。しかし、それに対し、「治療者、援助者などが誘導して、ありもしない性的虐待被害の証言をさせている」（偽りの記憶症候群）と告発する運動が起こっている。それは、1992年に創設された「過誤記憶症候群基金（False Memory Syndrome Foundation=FMSF）」である。それは、性的虐待加害者として娘から告発された親（パメラとピーター・フレイド）が、虐待は虚偽だと主張し、このような団体を創設したのである。そこには心理療法士などの専門家も参加している。もちろん、心理療法家の誘導・操作の問題、偽りの証言、記憶がまったく無いわけではない。その数は少ないとは言われるが[8]、そのこと自体は問題化され、実証的な調査・研究がされるべきだ。特に記憶の問題については更なる研究を進める必要がある。しかし、FMTS運動を推進する者の中には、性的虐待の訴えが全部偽りであるかのように主張する者がいる。しかも、FMSFの顧問であった心理学者のラルフ・アンダーウェイジャーは「一人の無実の人間が誤って有罪判決を受けるより、一〇〇〇人の子どもの虐待が発覚しないほうがましだ」（バス／デイビス、1994=1997、424頁）とまで言っているという。そのような発言は大いに問題である。

そして、「記憶捏造論」によって性的虐待の事実を否認・否定するに止まらず、アンダーウェイジャーは、子どもに対する近親姦、性行為（性的虐待）をも肯定するような発言もしている。1991年、オランダの小児性愛雑誌のインタビューで「もちろん……（中略）……子どもを性的対象にする者は、自分の選択を勇気を持って肯定すればいい。……（中略）……、子どもを性的対象にする者も、親密さと愛を追求している。“これこそが神の意志”と開き直っていいのだ」と答えていたという（斎藤、1999、133頁）。このような発言がFMSF運動に関わる人々皆に共有されている典型的な意見だと決めつけることはできな

---

[7] VOCALは、ミネソタ州ジョーダンで起こった子どもへの集団性的虐待裁判*の元被告を中心に創設された。子供への虐待容疑をかけられた人々への権利擁護を目的とし、子どもによる性的虐待の訴えは虚偽であると主張する（バス／デイビス、1994=1997、399-400頁）。

*その事件では何十人もの子どもが加虐的儀式による虐待を受けていたという告発で、60人もの大人が取り調べを受け、そして、25人が告訴され、1人が有罪、2人が無罪にされたところで、他の被告への告訴は取り下げられた（同、399-400頁）（上野、1996、71-72頁）。

[8] 児童期性的虐待に関する虚偽の訴えは、その割合が２～７％という報告（Jones & McGraw,1987）があるという（斎藤、1999、136頁）。また、Ｊ．ハーマンとＥ．シャツォーによる調査によると、子ども時代の性的虐待の記憶を取り戻したクライエント53人のうち、74％が裏付けとなる証拠をみつけたという（バス／デイビス、1994=1997、429頁）。そもそも、現実に起きている性的虐待は、あまりに多いのに、そのほとんどが報告されないまま放置されているということである（同、405頁）。

い。しかし、このような発言をするのはアンダーウェイジャー一人ではなく[9]、被害者の証言を否定し、そして、加害について否認し、加害を肯定する動きとFMSFの運動に連続性がないとはいえないのである。

性的虐待の告発へのバックラッシュには、単に、客観的・具体的事実として虐待が存在しなかったことを立証し、告発するというだけでなく、「女性と子どもをいつまでも信頼のおけない自分の言葉をもたない依存的な劣位のカテゴリーに押し留めておこうとする」（上野、1996、92頁）ところもあると言えるだろう。

1－3　性的虐待による心的外傷と被害の申告の困難

性的虐待の被害者は、まだまだ声を上げにくい状況だと思われる。声を上げにくいというのは、「セカンド・レイプ」を被る、つまり、被害を訴えても否定され、更に、セクシュアル・ハラスメント的対応をされてしまうこと、そして、前節で述べたようなバックラッシュがあるからという面が、まず一つ。しかし、それだけでなく、心的外傷それ自体による影響というのもある。ただ、両者は、それぞれ全く切り離されるようなものではないだろう。

心的外傷体験の中核は、「無力化 disempowerment と他者からの離断 disconnection」（ハーマン、1992=1996、205頁）である。とかく、加害者に抵抗できなかったレイプ被害者に対し「なぜ抵抗しなかったのか？　性交渉を喜んで受け入れたのではないか」と言われることがあるが、実際にはそうではなく、恐怖で抵抗できなくなっている（無力化）のである。更に、加害者（例えば性的虐待をする親）から「絶対誰にも言ってはいけない」「話したとて誰も信じない」と脅されたりすることもある。すると、誰にも自分が受けた被害のことを話せなくなってしまう。また、周りの人に訴えることができたとしても、「そんなのは嘘だ」と頭から否定されてしまったり、「お前が悪い子だから」「お前が誘惑したのだ」と、自分に非があったように言われ、罪悪感、恥辱感などを植え付けられてしまうことが多い。あるいは、性的虐待を受ける時に、加害者から「お前だけが頼りだ」と言われたら、被害を否認せざるを得ず、自分の感情を感じないようになったりもする。こうして外傷的事件の被害者は、他者から離断され、孤立無援感、更なる無力感に苛まれてしまうのだ。そして、それでもその環境で生きなければならないことによる葛藤、自己の分裂状態に陥った

[9] 例えば、アンダーウェイジャーの発行する『子どもへの虐待告発の争点』の編集委員でもあるリロイ・シュルツは、「大人と子どもの間にセックスの合意はある」と書いていたり、「性犯罪における被害者の役割はきわめて大きく、その多くはむしろ加害者と呼べるくらいだ」と語ったりしているという（バス／デイビス、1994=1997、401頁）。

りする[10]。とにかく、外傷的事件とは、被害者にとって＜自分以外の人々との関係において形成され維持されている自己（セルフ）＞、世界の安全性についての基礎的前提が破壊されることなのだ（同、75 頁）。

そして、被害の申告、立証を困難にする心的外傷の症状として先に挙げた解離、トラウマ性健忘症――外傷の記憶を意識に統合できない――が挙げられる。ジョン・ブライアーとジョン・コンティの調査によると、性的虐待を受けた 450 人のうち 59%が 18 歳以前に虐待をまったく思い出せない時期があったと答えているという（バス／デイビス、1994=1997、429 頁）。しかし逆に、外傷体験の記憶が再び蘇ってくる「再演＝フラッシュバック」も心的外傷の特徴的な辛い症状である。ここでは挙げきれないが、このように性的虐待、性暴力などの被害者は、このように心的外傷による PTSD（心的外傷後ストレス障害）の諸症状[11]によっても苦しむのである。

１－４　性的虐待とトラウマ的関係の反復――セックス依存症者の事例――

では、性的虐待を受け、このような心的外傷を抱える者は、どのような関係性を生きるのだろうか。その性的な在り方はどのようであるのか。ここで、一人の女性の例を取り上げたい。この事例は、ロビン・ノーウッド著の『愛しすぎる女たち』の読者からの手紙を集めた本、『愛しすぎる女たちからの手紙』に収録されているものである。

……私は二年余り前から＜近親姦・親の会＞に入っています。

この会は、自分の子が、自分や配偶者や他の近親者の性の犠牲になった親たちの集まりです。……。

わたしは五歳のときに性的暴力を受けました。はじめてこのことを思い出したのは、二年半ほど前です。

＜親の会＞のプログラムにはない、結果から原因を探る心理療法を受けていたときのこ

---

[10] 近親姦犠牲者の自己の分裂、葛藤状態については、注 4 を参照。

[11] PTSD の多数の症状は大きく３つのカテゴリーに分けられる。「過覚醒 hyperarousal」「侵入 intrusion」「狭窄 constriction」の３つである。「過覚醒」とは、持続的な警戒体制であり、その状態では「些細なことで驚愕し、些細な挑発にも苛立たしく反応し、睡眠の質が下る」（同、50 頁）。「侵入」とは、外傷的事件の反復再体験である。それは、「覚醒時にフラッシュバックとして現れることもあり、睡眠中に外傷的悪夢となって現れることもある」（同、52 頁）。そこで現れるような外傷性記憶は、「通常の成人型の記憶のように言語によって一次元的な（線形の）物語にコード化されない」ような、「凍りついた記憶」（同、53 頁）である。「狭窄」とは、すなわちマヒ numbing である。恐怖など圧倒的な感情状態に対する防衛として、意識状態がマヒしたり（離人症、現実感喪失等）歪んだりする。（外傷性）記憶は、通常の意識から切り離されたり、意識的に抑圧されたりする。行動面に関しても自発性、主動性が冒されるので、生活自体が狭められる（同、61-69 頁）。

とです。しかし、そのセラピストは性的暴力の影響について認識不足だったらしく、一刻も早く忘れて、普通の生活を続けるようにと、私にアドバイスしました。それこそ、私の望むところでした。過去の体験とそれに対する感情には目をつぶりたかったし、その体験が現在の生活に尾を引いている事実も無視したかったのです。ところで、記憶が甦ってから半年後に、私は結局、二度目の夫とも別れました。そしてその時、彼が私の十五歳の娘に性的虐待を行なっていた事実が判明したのです。それで、ただちに<近親姦・親の会>に参加したのです。

……

今思うと、私は文字通り“目立たない子ども”でした。あなたの本に出会う前にある会に入っていました。それは、枕をバットでたたくことで怒りを表に出すようにしようという会でした。この会は、幼児期に性的虐待を受けて成人した者。男女を問わず、その加害者。性的虐待を受けた子どもの親から構成されていて、私には再加入の権利があります。

会に参加しているうちに、性的虐待を受けた時の状況を、詳しく思い出しました。

誰かが膝で私の胸を押さえつけているのです。ところがそれはちょうど、しょっちゅう私に怒鳴ったり暴力をふるったりセックスを強要したりした、アルコール依存症の最初の夫がしたことと全く同じだったのです。私は愕然としました。子どもの時に受けた性的虐待と同じものを、私は大人になっても、自分で選んだパートナーから受けていたのです。

……

長い間、私は、私の中に刻まれた得体の知れないものに対抗するには、酒に酔ってバーで行きずりの男を拾うしか方法がありませんでした。私の知っているコミュニケーションの仕方は、セックスしかありませんでしたから。それでも効き目がないときは、私と同じくらい堕落した男と結婚して、酒よりも顔を腫れあがらせることで我を忘れました。

セラピストは、私が私を許せないと思っていることに目を向けるよう助言してくれました。いつも欠陥のある男や危険な男、だめな男、妻のある男、病弱な男等々、そういう男ばかり選ぶ自分を、私は堕落し狂っているのだとずっと思ってきました。……。私がいつも求めていたのは、不健康な男と一緒にいるときに味わう“例の”感覚だった、ということがわかったからです。

近親姦以外は歩み寄ることもなく、支えもなく、意思の疎通もない家庭で、私はいつもその感覚を味わっていたのです。

成績が上がっても家の手伝いをしても、両親は満足しませんでした。大人になっても、それを私は再現していたのです。私を殴り倒して強姦し、憎悪の言葉を浴びせかけ、おまえはだめな女だと言うような男ばかりを選んだのです。そんな選び方をした自分を、私は

ようやく受け入れ、何が問題なのか見つめるようになりました。

まだ誰かと関係をもつ自信はありません。回復のきざしが見えはじめたばかりで、誠実な男性は刺激が乏しく、存在感が薄く感じるのではないかという不安もあります。しかし、男性がいなくても、こんなに落ち着いた気分でいられるのははじめてのことです。

……こんなにも自虐的なやり方で反乱を起こしたのは私ひとりではなかったと知りました。……

現在は、私と同じような傷を負って、それがもとで他者と幸福な関係を持てなくなった女や男たちのグループに入っています。そして、生まれてはじめて、男を自分と同じ人間として見ることができるようになりました。同じように傷を負い、同じように孤独で、同じようにセックスを介してなんとか人とコミュニケーションをとろうとし、同じように回復に向かっている仲間だ、と。

私は順調に回復に向かっていますし、間もなく健康な関係をもてるようにもなると思います。まずは友だち関係からはじめ、セックスなしでも人を愛せ、一緒にいられるようになりたいと思います。今まで誰とも親密だったことはありません。まるで赤ん坊にもどって、最初からやり直すような心境です。いつか、本物の親密な関係性がもてたらいいと、心から思います。

……　　サンドラ・S

（ノーウッド、1988=1991、170-174 頁　「……」部は筆者による中略）

いささか引用が長くなったが、この例は、性的虐待被害者の対人関係の困難、性的実存の在り方、そして、回復の姿について、かなり典型的な形で語られている。最も重要な点は、サンドラが、子どもの時に受けた性的虐待を反復するような性的関係をもっているということである。「子どものときにセックスの道具として利用されたサンドラは、大人になってからも自分やセックスに対する主体性を持てなくなって」（同、174 頁）おり、自虐的な性的関係でのコミュニケーションしか選びようがなかったのである。性的虐待は、肯定的な人間関係を受け入れられないほど、被害者に深く自己嫌悪を植え付けるのである。また、酒を飲んだり男から殴られたりすることは、我を忘れ、子どもの頃からの傷を感じなくすることでもあったという。しかし、それによってかえって自己否定感、空虚感などが更に強まり、自虐的な関係を反復する悪循環から抜け出せなくなっていったのである。

つまり、被害者が自ら外傷の反復を「求めて」おり満足を得ている「マゾヒスト的人格障害」（第２章２節参照）だとして単純に「被害者に非あり」とするのは問題である。快感を得たといっても、「幼少期の被虐待のシーンが意識的にエロス化されて強迫的に再演され

ているだけのこと」（ハーマン、1992=1996、175 頁）である。また、被虐待の反復は、快感を得ているというより、恐ろしいにも関わらず「人間関係のやむを得ない代価として甘受する」（同、176 頁）ということだったりするのだ。

2　マゾヒズムという言説――女性への支配――

前章の４節で挙げたサンドラ・Ｓは、確かに不幸な異性関係を繰り返してきたかも知れない。それは、自分で選んでいたことだと言えるかも知れない。しかし、それは性的虐待の被害を受けたことでそのようなパターンから逃れられなくなったという過程があってのことなのだろう。大人になってからの彼女の表面だけを見て、彼女を「マゾヒストという自己決定をして満足している人だ」と評価することはできない。しかし、現実には、そのような表面的な判断がなされていることがあるだろう。しかも、「レイプされたがっている女もいるのだ」ということすら時折耳にする[12]。

本章では、精神分析においてマゾヒズムと女性性が結びつけられて論じられたこと、そして、現代の精神医療において提唱されかかった「マゾヒズム的人格障害」という診断名について述べておこう。このような例を通して、女性に対する支配的な姿勢を示す言説の表れ方をみてみよう。

２－１　マゾヒズムと女性性

マゾヒズムについては、心理学（――精神分析、自我論）など様々な立場で論じられており、その定義、その概念が指す範囲自体も一定とは言えない。例えば、ドゥルーズは、真正のマゾヒズムを、ザッヘル＝マゾッホのように、契約を結んで自らを女性の奴隷になるものだとする。しかし、精神分析などの領域においては、マゾヒズムを女性性と結びつ

---

[12] こうしたことが、具体的な特定の女性について指摘される言説もあるだろう。例えば、バクシーシ山下監督のレイプＡＶ『女犯６』の最後のテロップに「この作品はフィクションであり、モデル本人の願望を率直に映像化したものです。決して暴力、差別等を肯定するものではありません」と出ている。ここで、「そのようにレイプされることが本当にモデル本人の願望なのだろうか？」「モデルは本当に嫌がっているのではないか？」と思った時に、本人に確かめることは困難だ（「問題化」の困難については、［浅野、1998ｂ、154 頁］参照）。

問題を考える際、ＡＶにはＡＶ固有の難しさがあるとは思うが、性暴力一般を考えてみても、この「問題化しにくさ」は性暴力問題の大きな特徴だと思われる。近親姦、性的虐待などは、それが家庭の密室（家庭自体が密室、あるいは、他の家族成員に知られないように虐待がなされる）でなされることが多く問題が表に出てこない、あるいは、表に出ても問題を否認されることが多い。こうしたことは、性暴力を維持、再生産させる要因の一つである。

けたものの方が目立つように思われる。

完全な形でサディズム、マゾヒズムを命名したのは、クラフト＝エビングで、彼はマゾヒズムの全体を＜女性的精神要素の病理的な過度の発展、女性的精神のいくつかの特徴の病理的増進＞とみなした。

精神分析におけるマゾヒズム研究の最も基礎に位置づけられるのはフロイトによるものであるが、特に『マゾヒズムの経済的問題』をここでは挙げる。そこでフロイトはマゾヒズムを次のように分類している。①性愛的マゾヒズム　②女性的マゾヒズム　③道徳的マゾヒズムの３つである。まずは、この３つについて簡単に説明したい。

性愛的マゾヒズムとは、苦痛を与えられることに快感を覚えるというもので、他の２つのマゾヒズムの根底をなすものである。その生理的基盤は、ある限度を越えた過度な刺激（苦痛、刺激であっても）にともなう性的興奮である。一方、人間には、性的欲動、リビドーとは対照的に、有機体の個々一切の有機体単位を無機的静止状態へ還元する「死の欲動」もある。これが、外部に向くとサディズムになるが、そうした破壊欲動の一部が人間の有機体内部に残ってこうした性愛興奮作用に奉仕する時、それは一次的マゾヒズムとなる。さらに、外部に投射されていたサディズム、破壊欲求が内面に再び向けらると二次的マゾヒズムとなる。

今度は、女性的マゾヒズムである。それは女性がもつマゾヒズムのことをいうというよりは、ある種のマゾヒズムを「女性的」と称しているということである。女性的マゾヒズム的なマゾヒストは、小さな頼りない、依存した、ひとりでは生きてゆくことのできない子供、いたいけない子供として取り扱われていることを欲しており、マゾヒストの空想が意味するものは、自らを「女性的な状況に置くこと、すなわち去勢され、交接され、または子供を生むこと」（フロイト、1924=1970、302 頁）だという。また、フロイト直門の精神分析学者マリー＝ボナパルトによると、女性（雌）の身体が男性（雄）のペニスの侵入を受けるということが、「女性の心理的要素の病的亢進」としてのマゾヒズム（クラフト＝エビング的な意味でのマゾヒズム）につながるのだという。

そして、道徳的マゾヒズムについてである。それは、無意識的罪悪感を満足させようとするものであり、屈辱、苦痛、損害、処罰を招く行為が反復される。しかし、そこに性的快感はない。道徳的マゾヒズムにおける罪悪感は、自我と超自我の間の緊張の表現である。自我は、「自己が自己の理想、すなわち、超自我によって提起された要請に充分に応えられぬという事実にたいして不安の感情（良心の不安）をもって反応」（同、306 頁）しているのである。

以上、①から③まで述べてきたが、特に、ここでは女性的マゾヒズムを取り上げたい。それは、マゾヒズムと女性性の間に本質的な連関があるとすることが、女性を虐待したり貶めたりすることを正当化する言説につながりかねないからだ。岸田秀は、フロイトの女性的マゾヒズムの概念について次のように批判している。「性倒錯としてのマゾヒズムをフロイドは女性的マゾヒズムと呼び、女性的本質の表現と見ているが、しかし、男のマゾヒストが、セックスにおける女の役割、態度、姿勢などを屈辱的と見なし、自分が屈辱的と見なしているところの女性的なふるまいをすることによってマゾヒズムを満足させるということはあるにしても、マゾヒズムが女性的本質の表現であるとは言えないであろう」（岸田、1991、130 頁）と。もちろん、マゾヒズム自体が存在ないとはいえない。しかし、岸田の述べたこの点は、しっかり認識しておくべきである。

２－２　マゾヒスト的人格障害というラベリング

前節で見てきたマゾヒズム論について、それ自体が「女性＝マゾヒスト」という言説の元になっているのか、もしくは、それを強化しているものなのか。それとも、そうした学説は、むしろ、「女性＝マゾヒスト」という言説の一つの表れなのか、ここでどちらかに判断することはできない。しかし、精神科の診療などで、マゾヒズムという概念が「被害者に非あり」という発想で、現実に女性に対するネガティブ・ラベリングをするのに用いられようとしたことがある。1964 年の「妻殴打者の妻」（J.E.Snell, R.J.Rosenwald and A.Robey）という論文においては、夫からの暴力を受ける女性について、「夫の暴力は妻の“マゾ的な欲求”を満足させている」として、女性側の人格障害がこの問題の根源であると結論づけられた（ハーマン、1992＝1996、184 頁）。前章で取り上げたサンドラ・Ｓのような心的外傷に苦しむ者は、人格障害と診断され、「依存的」「マゾ的」「敗北願望的」とカルテに書かれることが多いという（同、184 頁）。このような女性への蔑視、偏見は、次のような事にも表れてきている。1980 年代中期、アメリカ精神医学会で DSMⅢの改訂が議題に上った時、男性精神分析医の一団が「マゾヒスト的人格障害」という診断名を追加しようと提案した。「状況を変える機会（複数）があるにもかかわらず、他者に搾取、虐待、利用される関係に留まる」すべての人間をこれに該当させるのだという。しかし、多くの女性団体がこれに反対した。「無力化された人にスティグマ（差別的烙印）を捺すのに使われるおそれがあるからである」（同、185 頁）ということも大きな理由であった。結局、この診断名は採用されなかったが、このように被害者、女性の欲求、人格に問題の責任を押しつけるこ

と自体がなくなったという訳では決してないであろう[13]。

3 恋愛としてのサディズム・マゾヒズムの「了解」
――性的実存の尊重を考える――

マゾヒズムという概念、いや、マゾヒスティックな性的傾向があり得るという認識は、確かに、性暴力、性的虐待などを正当化してしまう言説となりうる危険がある。しかし、実際に自らマゾヒストとしての性的実存を生きる人もいるだろう。いや、様々な性的実存を生きる人がいるはずで、マゾヒストに限らず「倒錯的」と見なされる人々もいるだろう。その人がそのような性的実存をもつのには、様々な要因が絡んでいるかも知れない。例えば、心的外傷が影響していたり、社会の言説が強く刷り込まれていたりというように。しかし、だからといって、「倒錯的な在り方は、その人本来の在り方ではないのだから、倒錯的な部分を取り除いて正常なものに変えてしまおう」ということでよいのだろうか？ そのように意識的に治そうとしても治らない、または「正常になれ」と言われても本人が納得できないということがありうるだろう。また、「レイプすることでしか満足できない性的実存をもつ者」の性的実存を、どのようにとらえたらよいか？[14] サディスティックな性的実存を「了解」することに意味があるのか？ そもそも、その人の性的実存を尊重し、「了解」するとは、一体どういうことをいうのか？ 本章では、あるサド・マゾヒストの性的実存の「了解」を通じて、性的実存の「了解」とは何かということをみていく。そして、次章で、近代が生み出すサディズム、近代そのもののもつサディズム性、そして、性的実存の「了解」によってサディズムを超えていく過程をみていくことにする。

3－1 M. ボスの人間学的倒錯理論

ここで、性的実存の尊重、「了解」とはいかなることかということについて考察を深めるために、M. ボスの人間学的倒錯理論を取り上げてみたい。それは、精神分析的倒錯理

---

[13] また、マゾヒズムという言葉ではないが、暴力を受けつつも夫のアルコール依存症を支えてしまうといったような「共依存」という概念も、女性に対するネガティブ・ラベリングになっていることがあり、人間関係の中での自己を重要視する女性が否定的に捉えられることがある。だが、「共感的結合を求め維持する女性の技量の重要さは、人間の生活と関係と家族と、変化し続ける社会を支える大切な手段として正当に評価されるべき」（スローヴン）（ペプコ編、1991=1997、249頁）なのである。共依存的な生き方をしていた人に、「そのような生き方を変えてもいいよ」というメッセージを与え、自立を方向づけるというのが共依存という概念の本来の意義ではないかと思われる。

[14] 注3を参照。

論などを批判するものであった。精神分析では、性的倒錯をヒステリーや強迫神経症と同じく二次的退行及び抑圧の産物として、機械論的、客観主義的に説明する。それは、実際の「了解」あるいは追体験を可能ならしめるものではなく、人間固有の本質と愛及び愛の諸形態の本質を見失うものだという。ボスによると、恋愛現象とは、それが倒錯的で欠陥のあるものでも、「恋愛の現実」即ち恋愛的世界内存在可能性から把えられなければ、完全に記載することはできないという。性的倒錯者は、素質的、生活史的要因による障害のために自然な恋愛ができなくなっているが、そのような障害を乗り越えて、歪められた形ではあるが恋愛的世界内存在可能性に到達しようとしているということである。

３－２　サディズム・マゾヒズムという性的実存の「了解」

では、ボスは実際に倒錯者の恋愛の在り方、性的実存をどのように「了解」していったのか。『性的倒錯』（ボス、1947=1957）における、ボスのクライエントでサド・マゾヒストのエリッヒ・クロッツのことを取り上げてみたい。

まず、エリッヒの生育歴を述べよう。彼の父親は、鉄のような意志の強さをもち、勤勉で、厳格であった。仕事至上主義であり、立身出世、競争相手をやっつけ突進することのみ望んでいた。そして、情緒的なものを否定しており、家庭そのものも厳格であった。彼にとっての父親とは、「薄暗い地下の穴倉の上の重苦しいセメントの天井」「鎧」「灰色の丸太」であった。

そのような父親のもと、エリッヒは「気が狂いそうなほど孤独」で、感情的な動きを恥じ、本心を他人に見せなかった。自分は何も直接心で感じることがなく、生きた肉体（自分のものも他人のものも）を感じることができなかった。そのような彼は大衆を超えて「第一人者」（成功した商人）になろうとした。そして実際に競争相手を打ち負かし、社長になった。しかし、本当の幸福は感じられず、世界は無意味に見えた。そして、世界全体と自分を叩きつけ壊したいという憎しみの発作に襲われるようになった。エリッヒは、14 歳でマゾヒスティックな、あるいは、サディスティックな空想による興奮を得るようになった。そして、18 歳で初の女性体験をし、「あらゆる値段の女達を多量に消費した」のである。しかし、空虚ですぐに飽きてしまった。女性が「冷たい動物」で自分を利用しているように感じられたのである。そうして、彼はサディスティックな性的空想の現実化による満足を得るようになった。それは、職業における無遠慮な暴力への喜びや、競争相手を打ち負かした時の痛快さに伴うものとは別の喜びで、「いいあらわしがたく解放的」であった。ただし、彼によれば、それは女性達が実際にエリッヒに共感し、彼女達がその苦しみを喜んでいることを彼自身が実際に感じることが必要なのだということだ。エリッヒはこのよう

に語る。「私が女を罵り、侮辱し、乱暴な言葉でけがすのは、それによって、彼女が一人前の女としてもっている高慢な態度をぶちこわし、十米もある私と彼女の体との距離をこわそうとするのです。私が女達をなじり、女達が泣き叫ぶようになると、このような女達も非常に静かでやさしく温和になります」（ボス、1947=1957、103-104 頁）と。

そして、エリッヒは彼女達に鞭打たれたり首をしめてもらうようなマゾヒスティックな性的関係では、更に大きな満足を得ていた。しかし、そこでは容易に自制心を失い、深淵に落ち込んでしまう危険が感じられたのである。まるで、自分が何の責任もない赤ん坊のようになるのだという。彼は、自分のマゾヒスティックな欲望について次のように語る。「一度私を思いきりなぐって、私の周りの鎧をたたきこわしてもらいたい。私は脱け出したくて仕方がないのです」（同、103 頁）と。彼は、爆発したいのだ[15]。あるいは、自分の内的な真実に触れたいのだ。彼は、歯医者からひどい痛みを与えられた時、勃起が起こり深い喜びを感じたと語る。痛みが、歯という外面的、外殻的なものを越え、自分の存在の中心へ侵入してきたのだと。

では、エリッヒのサド・マゾヒズムの意味をボスはいかに「了解」したか。まず、サディズムに関してみていこう。それは純粋な憎悪ではない。破壊、攻撃自体が自己目的なのではなく、エロティックのための手段であって、現実世界での競争、暴力、征服とは異なるものである。ボスは次のように述べる。「極端な孤独と硬化とが身体的及び精神的領域に於て愛の実現可能性を深く抑圧しているところの、鉄と鎧と灰色の丸太に包まれた彼の世界に於ての敵対的な殻と枠とを打ち破り、人間存在の愛情的確信、男性と女性との愛の融合への入口を作ることが出来たのである」（同、121 頁）。つまり、「増大する抵抗と硬化の世界及び愛と献身の不可能性をつき破り征服し、どうにかして愛の融合を、それがいかに制限されたものであるとしても可能ならしめようとしているものである」（同、122-123 頁）と。但し勿論、エリッヒの場合も、女性達を征服する際、そこに復讐の喜びや征服感も含まれていたのであった。ただ、ボスは次のように言う。「この暴力的な破壊の際に、相手の完全な人間性の多くのものが一緒に破壊され、従って二人の同等の独立した人格の相互的な愛情的統一は不可能になるということは確かである。しかしエリッヒの場合には、殻の破壊は人間性そのものの破壊にまでは進まなかった。彼の相手の女が自分の意志をもち、

[15] ただし、エリッヒ・クロッツにとっては、自分が相手の「首を締める」のか、自分が相手から「首を締められる」のかというのはどちらでもよく、「首を締める」こと自体が重要なのだという。首を締めることの意味についてエリッヒは次のように語る。「首をしめ、しばりつけることは非常な不安を伴い、そしてこの不安の中に生命と快楽とが圧縮され、ますます狭い空間の中に緊密にとじこめられるのです。外部からの不安が強ければ強い程、内部における快楽は活溌になり、最後に不安による束縛が破壊され、すべてが爆発します。初めの不安による圧縮が強ければ強い程、爆発は喜びに充ちたものになります」（ボス、1947=1957、106 頁）と。

彼がその女を一人の人間として認めることが必要であった。ただ彼女の意志が完全に自分の意志と一致しなければならなかった」（同、121 頁）と。

では、マゾヒズムについてはどうであろうか。マゾヒズムにおいては、自分の殻の破壊、自制心の喪失の度合いが強く、より大きな没我愛の可能性を含んでいたのだという。

ボスは、エリッヒについて、このような「了解」をしていった。すると、エリッヒは、妻の自発的な愛情及び彼自身の愛情可能性を体験的に把握することができるようになっていった。それに従って、鎖や鞭を実際に使うことは少なくなり、せいぜい性的行動の際にそれらの道具を傍に置いておくだけになったのである。

３－３　性的実存の了解の意義

本稿第１章、第２章では、加害者側が正当化されるような言説、「被害者に非あり」とか「被虐待を望んでいるのは被害者だ」とするような言説について批判的に述べてきた。それに続いて、本章ではサド・マゾヒストの性的実存を「了解」する事例を取り上げてきた。しかし、それは加害、被害の正当化になってしまうのであって、本稿の前半で述べてきたことと矛盾するのではないかと言われるかもしれない。それに対して、「そうでない」と答えれば、本章の事例は、単なる「治療的操作」の一例ではないかと言われるかも知れない。こうした問題を念頭に置きつつ、「了解」ということについて考えていく。但し、エリッヒ・クロッツも含めた加害性の問題については、「おわりに」で改めて述べることにする。

「了解」とは、他ならぬまさにこの状況において、他ならぬ具体的なその人自身として存在しているその意味、在り方を受け取ること。その人が、どのように共同世界に関わり、存在しているかということを捉えていくことである。それは、機械的な単純な因果論による説明を与え、相手を上から規定したりとか、相手を対象化して客観的に分析して「正解」の解釈を得るというものではない[16]。むしろ、コミュニケーションの過程において相手の存在の在り様が立ち現れていくことに関わっていくことが、了解の過程であろう。重要な

---

[16] 例えば、ここでレズビアンについて考えてみる。確かに、男性に虐待されたことで性生活や情緒面で男性より女性と関係を作るようになる女性もいるだろう。だが、あるレズビアンは次のように語る。「「お父さんに虐待されたから、レズビアンになったのね」とよく言われるが、これほど頭にくる言葉はない。人はこうやって私の選択権を奪おうとするのだ。もし私が人殺しだったら、それが性的虐待の影響だと言われても致し方ない。性的虐待が培うとすれば、それは暴力や憎悪であり、人を愛する能力とは関係ないのだ」（バス／デイビス、1994=1997、288 頁）、「私がレズビアンなのは女を愛するからで、男を憎んでるからじゃない」（同、289 頁）と。

この語りは、性的実存の尊重の重要性を示すとともに、暴力によって同定される性的実存については、レズビアンのように愛情の対象によって同定される性的実存と同様に論じられない部分があることをも示しているだろう。

のは、その過程そのものだろう。

ここで、本章の事例で取り上げた「了解」は、加害、被害を正当化、固定化するのかということについて考えてみる。先の事例において、エリッヒ・クロッツのサド・マゾヒスティックな性的実存は変化し、暴力的でなくなってきている。このような変化の過程を歩んだことからしても、「了解＝単なる現状の正当化、固定化」とはいえないだろう。(但し、その過程が変化の過程なのか、それとも形的には変化しないという過程なのかはケース・バイ・ケースだろう。) では、これがなぜ、エリッヒが暴力的でなくなる変化につながったのか。それは、治療関係のコミュニケーションによってエリッヒの「共同世界への関わり」が開かれ、彼自身が自分の愛情可能性に気づき、自分の存在の殻を緩めることができたからであろう。逆に言えば、エリッヒの殻が軟らかくなったということ自体が、了解的コミュニケーションが成立していることの証左といえよう。こうした過程は、第１章４節に挙げた性的虐待被害者のサンドラが自助グループに参加して仲間と共感し合っていく中で自虐的な関係を手放し、親密な関係を求めるようになったことに通じるものである。それは、単に表面的な部分だけを見て、「自分で選んでやっているのだから勝手にそうすればいい。あなたはそういう人だ」と突き放したり、規定するようなものではないだろう。性的実存の尊重、「了解」とは、いわば、その人がいかに共同世界に開かれているかを見ていくことで、立体的に深く、理解、受容することである。そこには、相手の肯定性への信頼が基礎にある。

４　近代の虚無とサディズムから生命性へ

前章では、サド・マゾヒズムという形ではあったが、恋愛の一形態の事例を取り上げた。だが、「同意があるなら愛のないセックスも肯定しよう」「セックスはコミュニケーションでなければならないということはない」という言説もある。本章では、こうした言説の根底にある近代社会、現代社会の虚無感について、そして、それを超え得る可能性について述べることにしたい。

４－１　近代の非生命性、サディズムとその超越
――身体の否定としての自傷と身体の回復としての自傷――

ところで、前章におけるエリッヒ・クロッツが子どもの頃から生きた世界、つまり、彼の父親の価値観の世界、これが近代社会の典型といえるのではないだろうか。競争相手をやっつけることのみを望む厳格な仕事至上主義の勤勉さ、情緒的なことの否定といったこ

とである。エリッヒは、こうした中で、気が狂いそうなほどの孤独を感じ、世界が無意味なものと感じられたという。厳格な「禁欲」、「支配」「競争」による人間関係、自分自身の存在根拠から切り離された「虚無感」……（ボス、1947=1957、107-108 頁）。本章では、前章のエリッヒのような恋愛としてのサディズムと区別して、このような生命性に対する否定を虚無的サディズムと名付け、近代社会の権力の本質を虚無的サディズムだと捉える。

虚無的サディズムについて、ドゥルーズのサディズム論に従って簡単に述べよう。虚無的サディズムは、自己懲罰的な超自我によって自己の身体、欲望を否定することである。サディスト（サド）が虐待するのは、実は母親としての女性、母親と一体化しているナルシスト的自我であり、母親と一体化したい欲望を否定するのだ。つまり、サドのサディズムは性的欲望に対して、むしろ否定的で、「禁欲的」なものである（ドゥルーズ、1967=1973、150-163 頁）。

では、こうした虚無的サディズムが近代的であるというのはどういうことか。ホルクハイマー／アドルノによれば、近代合理主義は、理性の形式化、思考の抽象化、手段の物神化によって、「道徳的無感動」をもたらすという。そして、「不正や憎悪や破壊でさえ経営作業」（ホルクハイマー／アドルノ、1947=1990、156-157 頁）になり、理性が殺人に対して原則的反論ができなくなってしまうのだ。そうしたことを、ホルクハイマー／アドルノは、サディズムにたとえる。サディズムは、生命、自然に対して否定的、虚無的という意味で、暴力的、倒錯的である[17]。近代的規範（近代的理性）の本質は、こうした非生命性、虚無感である。

それは、自然や自己、他者に対して単に否定的だというのではなく、支配の幻想から、それらをコントロールの対象にするということでもある。「自分自身、家族、外界に対して

---

[17] こうした虚無的サディズムは、現代社会に根深く広がっており、――性的虐待から援助交際まで――、様々な形で現れているだろう。暴力性が前面に現れているものから、虚無感が漂っているようなものまで色々だろう。ここでは、虚無的サディズムの一つの典型として、レイプ AV について挙げてみたい。高橋源一郎は、AV 監督バクシーシ著『セックス障害者』の書評の中で、次のように述べる。「そのヴィデオはどれも見るに堪えぬほどリアリティに富んでいるのに、遠い世界の出来事のようだ。現実が遠い世界の出来事としてしか見えぬ者、それをぼくたちは死者と呼んできたのではなかったか」（高橋、1996）と。バクシーシ山下の AV は、多くがレイプもので、まさに「見るに堪えぬほどリアリティ」があり、実際のレイプではないかと問題視もされている（浅野、1998b、128 頁、149-154 頁）。だが、マルキ・ド・サドの『ソドムの百二十日』さながら、現実が遠くに見えるような感覚、死者の観点から物を見たような感覚も与えるというのだ。リアルなのに虚無的、非生命的、あるいは、サディスティックで非生命的だからこそリアリティがある……。こうした虚無的サディズムの根深さは、そのヴィデオそのものについてもだが、そうしたいヴィデオを観る人、そのヴィデオが流通していること自体にも現れているだろう。こうした感覚は、性においてだけでなく、最近の凶悪犯罪に動機らしい動機がない（「殺してみたかったから殺した」というようなもの）ことにも現れているだろう。

コントロールを失うことを、人々はもっとも恐れて」（シェフ、1987=1993、67 頁）いるのだ。あらゆるものを支配の対象にするということは、生命感のある親密なつながりを否定するということでもあり、そうした否定からますます虚無感が募る。そして、そうした虚無感、あるいは不安感ゆえに、更に対象を支配せずにはいられなくなってしまう。本当は、生命感のあるつながりを得てこそ満たされるのであり、生命感ある親密な関係を渇望しているのかも知れない。しかし、実際には支配、コントロールという形の関係しか持てないのだ。そして、また、虚無感、不安感が深くなって、更に支配を強めようとする……。支配、暴力と虚無感にはこのような深いつながりがあり、悪循環をなしている。これは、まさにサディズムである。

こうした悪循環は、第１章４節で挙げた性的虐待の被害者サンドラにもみられる。彼女は、自分に対してサディスティックだったといえる。心の傷、虚無感から、自虐的な性的関係を繰り返していったのだが、虚無感、自己否定感から救われるどころか、ますます否定感が増していった。ここにも、近代的なサディズム、その核にある虚無感、非生命性が表れている。しかし、彼女がそのように自虐的になってまでも（もちろん意識的にでなく）、それを繰り返していた意味は何だろうか。サンドラは、こう言っていた。「私は、私の肉体の中に刻まれた得体の知れないものに対抗するには、酒に酔って、バーで行きずりの男を拾うしか方法がありませんでした。……。それでも効き目がないときは、私と同じくらい堕落した男と結婚して、酒よりも顔を腫れあがらせることで我を忘れました」（ノーウッド、1988=1991、172 頁）、「こんなにも自虐的なやり方で反乱を起こした」（同、173 頁）と。まず、彼女は「我を忘れよう」としていのだろう。バウマイスターによれば、自分にとって重荷となる自己の意味、アイデンティティから逃避するために、痛みや酩酊といった直接的な身体経験を「今、ここ」で体験するのだという。

そして、それはサンドラにとって「自分の身体に刻まれたものへの対抗」「自虐的な反乱」でもあった。それは、親からの性的虐待、そして、それ以降のあらゆる関係性の中で振るわれた暴力によって自らの身体に刻印された権力への対抗、反乱といえるのではないか。ドゥルーズは、ザッヘル・マゾッホのマゾヒズムについて、先に述べたサディズムにおける父親＝自己懲罰的な規範、超自我に対する否認だとした。マゾッホは、契約を結んで女性を拷問者に仕立て上げたが、マゾッホはそれによって快楽を得るわけで、拷問者としての女性に、欲望を禁止する超自我的機能はないのである。マゾッホが受ける拷問は、自分の中の父親＝自己懲罰的な規範、超自我への懲罰なのである（ドゥルーズ、1967=1973、150-163 頁）。

更に、第３章のエリッヒ・クロッツについてみても、彼がサディストであったのみなら

ず、マゾヒストでもあったということは意味あることだと思われる。彼のサド・マゾヒズムは「厳格さ＝生命的存在との交流を阻む壁」を壊すことであったが、特にマゾヒズムにおいて、その破壊、没我の度合いが大きいものであった。ドゥルーズ／ガタリは、マゾヒズムにおける身体を「器官なき身体」だと言う。それは、超自我による欲望の禁止、自己への意味づけを取り払った後に残る純粋な身体性、「欲望の存立平面」であるという。ここでいう欲望は、エディプス・コンプレックスに歪められる以前の「欲望の流れそのもの」である。よって、こうしたマゾヒズムは、根源的な欲望、本源的な身体性、「存在そのもの」の次元に至ることである（ドゥルーズ／ガタリ、1980=1994、175-180 頁）。

このようにマゾヒスティックになることで、つまり、逆説的に自らの身体、生命性への否定を更に否認することで、近代的な虚無的サディズムを超える可能性も見出される。しかし、純粋に自己懲罰、超自我を否認するようなマゾヒズムというのが一般的なのではなく、ここまで挙げた事例、そしてこれから挙げる事例においても、自傷性は、虚無的な自己否定と、自己の生命性を確認、回復し虚無を超える側面とを併せ持つ両義的なものである。そのままの形では、現状の権力構造、近代的なサディスティックな権力から逃れられるわけではない。

４－２　自虐から生命性の回復へ

では、このような虚無的サディズムの世界においては、生命性を実感するにしても、自虐的な形をとらなければならないのだろうか。虚無的サディズムの裏側としてでなければ、生命感を味わえないのだろうか。再び事例に立ち返ってみることにする。

サンドラ・Ｓは、そのきざしが見え始めたばかりだとは言いつつも、「順調に回復に向かっていますし、間もなく健康な関係をもてるようにもなると思います」（ノーウッド、1988=1991、173 頁）と手紙で語っている。第１章４節に挙げたサンドラの手紙の断片から、サンドラにとって、セラピストの面接ももちろんだが、自助グループ[18]への参加の意義が大きかったことが窺える。以下、回復、成長における自助グループ参加の意義について何点か述べてみたい。

---

[18] 自助グループと一口に言っても様々なものがある。本稿で「自助グループ」という時、AA（Alcoholics Anonymous）の流れを汲む 12 ステップ系の自助グループ（依存症者、AC(Adult Children)など）、あるいは、それに類する自助グループのことを指す（AA の共同性については［鎌原、1998］参照）。

しかし、ミーティングなどの形式については 12 ステップ系、あるいはそれに類する自助グループ固有の特徴があるが、「共感性」の重要性などは、自助グループ一般について言えることであろう。

まず、自助グループにおける対等性と共感性という点である。サンドラは、ノーウッドに手紙を送った当時、「自分と同じような傷を負って、それがもとで他者と幸福な関係を持てなくなった」人のグループに入っていた。そこで、「生まれてはじめて、男を自分と同じ人間として見ることができる」（同、173頁）ようになったという。虐待の心的外傷は、被虐待者を他者から「離断」させる。他者と関係性をもつにしても、「支配－被支配」的、共に傷つきながらも依存し合う関係の反復となったりする。そのような関係においては、虐待を受けた傷のことを共感してもらえるどころではない。それゆえ、「同じような傷」をもち、互いに回復を共にしようという仲間と出会えてはじめて、サンドラは「同じ」「対等」で、共感し合える関係性をつかみ始め、親密な関係性をもつことへの希望をもつようになれたのである[19]。

では、「共感」とは、どういう過程でなされるのだろうか。「共感」に至る過程は、どういう意味をもつのだろうか。

自助グループでは、ミーティングの中で、一人一人が、自分の話したいこと、話せることを話し、仲間の話に耳を傾ける。話したくないとき、他のメンバーの話を聞く余裕がないときは、パスすることができる。自分の話をする側は、話を聞いてもらったり、自分に自分のことをじっくり聞かせることで自分を受け入れていき、聞く側は、その話を聞きながら、その話が自分の心に響いてくるを味わっていく。こうした中でなされていく「共感」は、第3章のエリッヒ・クロッツのサド・マゾヒズムの事例における「了解」に相当することである。まさに、この「共感」こそ、生命性ある関係性、親密な関係性のベースとなるものである。語る場の安全性と、こうした共感性が感じられていくことで、自分にも他人にも受け入れられないと思っていたこと――自分が目を背けていた過去の体験、感情、現在の問題など――に向き合って、自己開示できるようになる者もいる。

しかし、共感的、あるいは、了解的コミュニケーションが可能になっていくまで、サン

---

[19] しかし、現実には対等性、親密性は、たやすく実現されるものではない。12ステップ系の流れを汲む自助グループでは、「言いっぱなし、聞きっぱなし」などのルールを設け、メンバー間の関係が、誰かが誰かに指示、批判したりするというような上下関係にならないよう、工夫をしている。また、それは「同じ傷、同じ問題」ということで集まったグループ成員同士の差異を尊重する工夫でもある。対等性を目指すことが同質性の強制になってしまわないようにしているわけである。また、親密な関係を志向するといっても、実際には、サンドラのように支配－被支配関係、依存的関係を繰り返していた人が、自助グループで関係性を築く場合、そこでも支配－被支配的関係、依存的関係性を再現してしまうこともある。しかし、それをそれぞれ自らの課題と受け止め、回復、成長を共に歩んでいくことは、意味あることである。自助グループにおける共同性の問題については［鎌原、1997、1998］を参照。

ドラもエリッヒも、自虐的に（エリッヒは加虐的でもあったが）生命性を感じていたのではなかったか。ここで言う「共感」には、痛みがまったくないのであろうか？　それまで人間関係に何の問題もなかったかのようにスムーズに共感し合えるのなら、自助グループなどいらないくらいのではないか……。

「共感」につながる自己開示をすること、あるいは、仲間の話を自分の心に響かせること、それは、自分にとって暴力的といえるくらいラディカルな自己変革といえるのではないか。エリッヒ・クロッツの言葉で言えば、まさに、「厚い自分の殻を破る」ことである。自己開示する、あるいは、仲間の話を聞いてみようとすること、その場の仲間を信頼して参加みること自体、「跳躍」「賭け」といえるものだろう。エリッヒはサド・マゾヒズムという形で、自分の周りの厚い殻を破ろうとしていたが、自助グループでは、それを暴力の介さない共感的コミュニケーションとして行っていこうというわけである。だが、このように自己開示したり、他者を信頼して、親密な関係を築こうと自分の殻を破ることは大きな決断、痛み、不安等を伴うことなのである。そもそもあまりに辛いため向き合うことのできない体験、感情があるからこそ[20]、自己とも他者と親密でない自虐的な関係を反復していたのではないか。自助グループに参加する前のサンドラは、「過去の体験とそれに対する感情には目をつぶりたかったし、その体験が現在の生活に尾を引いている事実も無視したかった」（同、171 頁）というのだ。だが、そのような跳躍をできないままでの自虐的関係性では、確かに「虚無的サディズムへの反乱」として生命性を体験することができるとはいっても、結局、虚無的サディズムの権力から逃れられず、ますます虚無を深める悪循環に陥る。しかし、自己・他者を信じてみる、自己開示してみるといった跳躍、賭け、「自分の殻を破る」ということは、ある意味で、自虐的関係性を生きるより大きな痛みを伴うかも知れないが、しかし、そこで親密な関係が築けたとすれば、それは、虚無感からの解放へとつながっていき、そこで味わわれる生命感は、ささやかなものであったとしても深い喜びであろう。

---

[20] 自助グループという場ではあっても、そうした辛い体験、感情に向き合い、話すことが危険なこともある。危険と感じたら話さなくてもよいのだが、どれだけ話せるかは、話す本人が、グループに対して感じている安心感、信頼度の度合いによるものも大きい。しかし、それ以前にそもそも意識化するのが危険なくらい傷が深いから、自虐的な関係性や具体的な症状をもつことでそれに向き合わずに済んでいるという人もいる。（「人格的承認でなく、表面だけほめて欲しい」という人にも、そうした傷、虚しさ、絶望感があるかもしれない。）そういう傷にトリートする場合、意識化されない傷を無理に意識化（直面）させない心理療法が有効であろう（「気づき」（意識化）の問題については、［吉本／加藤、1993、202 頁］参照）。とにかく、自助グループは、傷に向き合う場所である以前に、その人がそこに居られる「居場所」としての役割を果たすことが重要である。

しかし、パラドキシカルではあるが、このような自己変革、「殻を破る」ということは、むしろ「ありのまま」の自己、他者を受け入れるという方向のものである[21]。自助グループへの参加によって、サンドラが他のメンバー（男性）について、「同じように傷を負い、同じように孤独で、同じようにセックスを介してなんとかコミュニケーションをとろうとし、同じように回復に向かっている仲間だ」（同、173 頁）と思えるようになったというのは、そのような自己受容だといえよう。傷や虚無感を、互いにありのままに悲しみ、共感し合うことで、生命性ある親密な関係性を育むことができるのである。逆に言えば、虚無感を埋めようと必死で「ありのまま」を受容することができなかったからこそ、変革どころか、サンドラは、自虐的関係性を反復していたのだといえる。いわゆる「癒し」、あるいは、「ありのまま」を受け入れるということは、個々人が現状への適応を図るものであって、社会の現状維持にしかならないという面もある。このことは確かに否定しきれない。しかし、それだけではないはずだ。自分の生命性を受け入れ、他者との肯定的な関係性を築いていくことで、その人の世界観が変容し、それまで否認していた理不尽さについて、新たに批判的な視点を持てるようになる可能性もあるだろう。それは、オルターナティブな社会を志向するのを諦めることではないのだ。

A. W. シェフは、男性（特に白人男性）が支配し、非生命を志向する近代社会を超えるシステムとして「新たな女性システム（emerging female system）」＝「生存過程システム（living process system）」（シェフ、1987=1993、16 頁）を構想する。それは近代社会が、到達不可能な目標達成を志向し、自己破壊に向かう閉じたサイクルであるというのとは対照的に、生命を維持し、育むシステムである。「生存過程システム」を生きるということについて斎藤学は次のように述べる。「自分の生命の過程を慈しみ、楽しみながら“自分のために”生きる生き方である。……自分の欲求を中心に行動しながらも、深いところで他人と調和することができる」（斎藤、1993、xviii 頁）と。このように生命の過程を慈しむこと、他者と深く調和すること。こうした生命性は、性暴力、性的虐待を支える虚無的でサディスティックな力を逃れ、それに対する抵抗の源泉となるだろう。サンドラが親密な関係性

[21] 但し、「『ありのまま』であれ」というのが規範として言われると、かえってその人に矛盾を感じさせたり、追い込んだりすることになる。「今の『ありのまま』の状態が辛いから変わりたいのだ」と思う人は多くいるだろう。また、「『ありのまま』でなければいけない」といって、遠い理想としての「ありのまま」を目指して「ありのまま」になれない自分を責めてしまって苦しむ人もいるだろう。「ありのまま」を受け入れるというのは、意識的努力では難しいものであって、非言語レベルでの肯定的コミュニケーションや、実際に共感、了解される体験が必要だろう［鎌原、1997、68-69 頁参照］。「ありのまま」を受け入れられるのは、「『ありのまま』であれ」という言葉を忘れている時かも知れない。

への希望をもち、エリッヒ・クロッツが自らの愛情可能性を育んでいった過程に、このようなシステムの可能性が見いだせるであろう。

おわりに——加害者の問題——

前章では、近代の本質としての虚無的サディズムについて述べたが、ここで更に、暴力性、加害者の問題について触れて、本稿を閉じたい。まず一旦、第3章を振り返ってみよう。問題なのは、エリック・クロッツがサディストである時のことである。この事例では、相互にその関係を認めている場合になされることだというので、第3章では攻撃する側の問題についての議論を広げなかった。しかし、「相互に認めている」ということが、実際はエリッヒの思い込みでしかなかった場合はどうか？　一方的な攻撃として性暴力についてはどうか？　エリッヒのサディズムにも、女性達を征服する際、復讐の喜びや勝利感も含まれていたというが、そのことの罪は問われるべきではないのか？　こうした問題が残っている。

加害者の問題。それは、加害者が自分の罪をどう引き受け、贖っていくかということである。その際、「了解」ということはどう位置づけられるだろうか。これまで述べたことから、「了解」の意義として、自己受容が進むこと、自分の中の愛情可能性が開かれること、他者との相互的な共感的関係性が開かれることなどが挙げられよう。それはつまり、「了解」とは、単に、自分を他人から理解してもらうというだけのことではない、それだけでは終わらないということだ。自分について否認せず受け止めていくことと、他者への共感力、想像力をもって了解してくことが、相伴っていくことである。実際、その人（加害者）に治療的に接する時、その人を加害に向かわせた感情、体験、その人の存在の在り方を「了解」すると同時に、他者への共感性を開かせつつ、「加害そのものは許されることではない」と認識させることが重要である。他者（被害者）の傷、痛みへの想像力を開いて、加害者が自分自身を深く受け止めていく時、それは自分の罪を痛みをも深く引き受けることになるだろう。自らの罪を贖い謝罪していくこと、それは、「被害者の痛みを活き活きと心のなかに描くことによって、傷つくことのできる柔らかい心を取り戻し、悲しむこと」（平川、2000、331 頁）である。そして、柔らかい心を取り戻し始めることで、例えば、性暴力以外に自己確認、欲望の解消の手段がなかった自分の傷、弱さに向き合うことになるかも知れない。加害者は、そうした傷、弱さを認め、自分を受け入れる時、更に他者の傷、痛みを深く感じていくであろう。

そのような実践を行っている例として、アメリカの民間施設「アミティ（Amity）」[22]がある。アミティでは、刑務所かアミティかを選択させられて入所した犯罪者、あるいは刑務所での受刑者、更に、一旦アミティのプログラムを終了した元犯罪者などが入所している。アミティでは、セラピストの資格をもった元受刑者がデモンストレーターとしてグループ・セラピーを行っている。元受刑者というかつての当事者がデモンストレーターになってレジデント（メンバー）達のロールモデルとなり、回復の道を示していく。

アミティのレジデントである性暴力加害者、犯罪者の多くは、成育上、家庭の問題があるなど「被害者」性ももっている。その中には性暴力被害を受けた男性もいるという（坂上、2000、276 頁参照）。そうした傷によって男性としての自分についての不全感（劣等コンプレックス）をもち、優勢な女性に対して復讐しようとして強姦した者もいるだろう（参考、中田、1985、10 頁）。グループ・ワークでは、一人一人がそれぞれ、自分が子どもの頃に虐待を受けた傷などに向き合い、それをグループの中で語り、互いに共感し合ったりする。あるいは、虐待・暴力被害者が、加害者側のジェンダーに怒りをぶつけたり、加害者が被害者側の気持ちを受け止め、反省していくというようなことが進められていく。アミティは自助グループ性が強く、安全に語れる場を作ること、レジデント間の対等な人間関係、信頼感をやしなうことを大事にしている。アミティでのこのような実践、それは、単に処罰と治療をばらばらに行うことではない。罪の償いに取り組み再犯をしないと心に誓い、それと同時に、過去の傷を癒すことで生きる姿勢そのものを変え、再犯を防ぐ実践なのである。

確かに加害者になってしまう者（男性）には、「傷ついた男性性」（ウェスト／ニコル／ロイ、1978=1985、61 頁-）をもった者もいるだろう。しかし、一方、自分が男性だというだけで暴力を振るったり、レイプ、セクシュアル・ハラスメントをしても構わないと思っている人、いや、その暴力性にすら気づいていない人もいるだろう。それは、単なる個々人の性格、考え方の問題に止まるものではない。男性の性暴力について加害者を擁護し、性暴力を再生産させている社会構造がまず問題である。そのような社会状況では、加害者が罪を自覚し贖ったり、自分の問題に取り組んだりすることは困難である。例えば、家族に暴力を振るったりしてきたアルコール依存症者の中には、自助グループや治療につなが

[22] アミティは、1981 年、元薬物依存症者で、刑務所の受刑経験もあるナヤ・ビーターなどによって創設された施設である。アミティでのプログラムの、「加害者」の「被害者」性（子供時代に虐待を受けたことなど）を受け止め、生きる姿勢を変えるというところは、A. ミラーの考え方をもとにしている。ミラーは、子供時代に受けた心の傷を放置しておくと、犯罪に走ったり、自傷行為といった形で自分への暴力に向くことがあるという警告を 1970 年代から発している。

るのが、家族に逃げられすべてを失ってからだという者がいるというが、変化するには「底つき」、つまり自分ではどうしようもないというところまでくるしかないのかも知れない。まず、「支配への幻想」がまさに幻想であることに気づき、深いところにある「無力」「虚無感」を認め、受容することなしに、加害者個々人の加害者性、性暴力の再生産を生み出す近代的な虚無的サディズムからは解放され得ないのだろう。他者を傷つけることへの感受性すら失った虚無的なサディズム、性暴力への根源的な批判をしていくこと。そして、そうした虚無的なサディズムによって生命性に満ちた関係を喪ったことを悲しむこと、傷ついたことを認めていくこと。虚無的なサディズムを乗り越え、生命性を回復するためには、この両者がともに必要なのである[23]。

[23] そもそも子供時代に受けた虐待などの傷を抱えて性暴力に及んでしまった人と、「レイプしてもそれをレイプとも思っていない、あるいはレイプして何が悪い」と思ってレイプした人との間のグレーゾーンにも、加害者がいるのではないだろうか。いずれにせよ、「男は他者（女性）を支配して当然、支配してこそ認められる」という価値観がその根にあるのだろう。そうした価値観は、女性への暴力を直接肯定するだけではない。それは、男性自身にとっても重圧となって、「自分は男らしくない」というコンプレックスを強めさせ女性への暴力に向かわせるところもあるだろう。

引用・参考文献

Baumeister,R.F., 1991, *ESCAPING THE SELF Alcoholism, Spirituality, Masochism, and Other Flights from the Burden of Selfhood*, BasicBooks

Bass,E & Davis,L., 1994, *The Courage to Heal* ＝1997、原美奈子、二見れい子訳、『生きる勇気と癒す力――性暴力の時代を生きる女性のためのガイドブック――』、三一書房

Bepko,C.(Edt.), 1991, *Feminism and ADDICTION*, The Haworth Press, Inc ＝1997、斎藤学訳、『フェミニズムとアディクション――共依存セラピーを見直す――』、日本評論社

Bonaparte,M., 1952, *Chronos, Eros, Thanatos*, Presses Universitaires de France ＝1968、佐々木孝次訳、『クロノス、エロス、タナトス――時間、愛、死――』、せりか書房

Boss,M., 1947, *SINN UND GEHALT DER SEXUELLEN PERVERSIONEN -Ein daseinsanalytischer Beitrag zur Psychopathologie des Phänomens der Liebe* ＝1957、村上仁、吉田和夫訳、『性的倒錯――恋愛の精神病理学――』、みすず書房

Deleuze,G., 1967, *Présentation de Sacher-Masoch:Le froid et le cruel*,Minuit＝1973、蓮見重彦訳、『マゾッホとサド』、晶文社

Deleuze,G./Guattari,F., 1980, *Mille Plateaux -Capitalizum et Schizophrénie*,Les Editions de Minuit ＝1994、宇野封一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳、『千のプラトー――資本主義と分裂症――』、河出書房新社

Freud,S., 1896, *Zur Ätiologie der Hysterie* ＝1969、懸田克躬訳、「ヒステリー病因論」、『改訂版フロイド選集　第９巻　ヒステリー研究』、日本教文社

――――, 1914, *Zur Geschichite der psychoanalytischen Bewegung* ＝1983、野田倬訳、「精神分析運動史」、『フロイト著作集 10　文学・思想編Ⅰ』、人文書院

――――, 1919, *Ein Kind wird geschlagen* ＝1984、高田淑訳、「「子供が叩かれる」　性的倒錯の成立に関する知識への貢献」、『フロイト著作集 11　文学・思想編Ⅱ』、人文書院

――――, 1924, *Das ökonomische Problem des Masochismus* ＝1970、青木宏之訳、「マゾヒズムの経済的問題」、『フロイト著作集６　自我論　不安本能論』、人文書院

――――, 1925, *Selbstdarstellung* ＝1969、懸田克躬訳、「自らを語る」、『改訂版フロイド選集　第 17 巻　自らを語る』、日本教文社

――――, 1931, *Über die weibliche Sexualität* ＝1969、、懸田克躬、吉村博次訳、「女性の性愛について」、『フロイト著作集５　性欲論　症例研究』、人文書院

Ganzarain,R.C/Buchele,B.J., 1988, *FUGITIVES OF INCEST:A Perspective from Psychoanalysis and Groups* ＝2000、白波瀬丈一郎訳、『近親姦に別れを――精神分析的集団精神療法の現場から――』、岩波学術出版社

Herman,J.L., 1992, *Trauma and Recovery*, Basic Books ＝1996、中井久夫訳、『心的外傷と回復』、みすず書房

Horkheimer,M /Adorno,T.W., 1947, *DIALEKTIK DER AUF KLÄRUNG -Philosophische Fragmente-*,Querido Verlag,Amsterdam

＝1990、徳永恂訳、『啓蒙の弁証法　ー哲学的断想ー』、岩波書店

Miller,A., 1981, *Du sollst nicht merken -Variationen über das Paradies-Thema-* ＝1985、山下公子訳、『禁じられた知――精神分析と子どもの真実――』、新曜社

Norwood,R., 1988, *LETTERS FROM WOMEN WHO LOVE TOO MUCH,* POCKET BOOKS ＝1991、落合恵子訳、『愛しすぎる女たちからの手紙』、読売新聞社

Schaef,A.W., 1981, *Women's Reality:An emerging female system in a white male society*, Winton Press Minneapolis

――――, 1987, *WHEN SOCIETY BECOMES AN ADDICT* ＝1993、斎藤学監訳、加藤尚子、鈴木真理子共訳、『嗜癖する社会』、誠信書房

West.D.J.,/Roy.C./Nichols.F.L., 1978, *UNDERSTANDING SEXUAL ATTACKS*, Heinemann Educational Books Ltd. ＝1985、作田明訳、『性的攻撃――強姦の精神病理――』、金剛出版

浅野千恵、1998a、「混迷するセックスワーク論」、『現代思想　1998.7　特集＝自己決定権　私とは何か』、青土社

――――、1998b、「セックスワーカーを搾取しないフェミニズムであるために」、『セクシュアリティをめぐって　シリーズ＜女性と心理＞第２巻』、新水社

――――、1998c、「「性＝人格論批判」を批判する」、『現代思想　1998.10　特集＝主体とは何か』、青土社

――――、1999、「ネオ・リベラリズムと性暴力」、『現代思想　1999.1　特集＝ジェンダースタディーズ』、青土社

上野加代子、1996、『児童虐待の社会学』、世界思想社

上野千鶴子／宮台真司（対談）、1998、「対談　上野千鶴子×宮台真司　メディア・セックス・家族」、『論座（1998.8）』、朝日新聞社

大澤真幸、1990、『身体の比較社会学　Ｉ』、勁草書房

荻野恒一、1969、『現存在分析』、紀伊國屋書店

小此木啓吾、2000、「まえがき」、『近親姦に別れを――精神分析的集団精神療法の現場から――』（ガンザレイン、R.C.／ビュークリ,B.J.著、白波瀬丈一郎訳）、岩波学術出版社

河合隼雄、1997、「「援助交際」というムーブメント」、『世界　特集＜生きにくさ＞という問題　1997.3』、岩波書店

鎌原利成、1997、「自虐から依存へ――近代の強迫的自律のパラドックス――」、『京都社会学年報　５』、京都大学社会学研究室

――――、1998、「霊的成長における超越性と共同性の問題――アルコール依存症からの回復とＡＡ――」、『京都社会学年報６』、京都大学社会学研究室

岸田秀、1991、『フロイドを読む』、青土社

斎藤学、1993、「監訳者まえがき」、『嗜癖する社会』、（シェフ,A.W.著、斎藤学監訳）誠心書房

――――、1999、『封印された叫び――心的外傷と記憶――』、講談社

坂上香、2000、「「加害者」の「被害者」性を受け止める試み――治療共同体アミティのアプローチから――」、『アディクションと家族　Sep.2000 Vol.17 No.3　[特集]性暴力とDV～加害者治療の可能性を探る』、家族機能研究

所

作田啓一、1995、『三次元の人間――生成の思想を語る――』、行路社

白波瀬丈一郎、2000、「解題」、『近親姦に別れを――精神分析的集団療法の現場から――』（ガンザレイン,R.C./ビュークリ,B.J.著、白波瀬丈一郎）、岩波学術出版社

鈴木水南子、1997、「セックスワーカーを「貶めない」性教育を」、『くらしと教育をつなぐ We 1997.８・９　特集　売春は悪いのか？』、フェミックス

髙橋源一郎、1996、「退屈な読書 93　『セックス障害者たち』と人間の条件」、『週間朝日　'96.11.22』、朝日新聞社

中田修、1985、「序」、『性的攻撃――強姦の精神病理――』（ウェスト,D.J./ロイ,C/ニコルス,F.L.）、金剛出版

バクシーシ山下、1995、『セックス障害者たち』、太田出版

速水由紀子、1998、「援助交際を選択する少女たち」、『<性の自己決定>原論――援助交際、売買春、子どもの性――』、紀伊國屋書店

平川和子、2000、「書見台　野田正彰著『戦争と罪責』」、『アディクションと家族　Sep.2000 Vol.17 No.3　[特集]性暴力と加害者治療の可能性を探る』、家族機能研究所

緑河実紗、1998、『心を殺された私――レイプ・トラウマを克服して――』、河出書房新社

宮淑子、1998、「性の自己決定とフェミニズムのアポリア」、『<性の自己決定論>原論――援助交際、売買春、子どもの性――』、紀伊國屋書店

宮台真司、1998a、「まえがき」、『<性の自己決定論>原論――援助交際、売買春、子どもの性――』、紀伊國屋書店

――――、1998b、「自己決定原論――自由と尊厳――」、『<性の自己決定論>原論――援助交際、売買春、子どもの性――』、紀伊國屋書店

宮台真司／鈴木水南子、1999、「パネルディスカッション報告」、『くらしと教育をつなぐ We　1999.２・３　特集　売買春の是非論を超えて』、フェミックス

吉本武史／加藤薫、1993、『現代催眠入門――深層アプローチの技術――』、教育メディア

（かんばら　としなり・研修員）

Does Respect for Everyone's Sexual Subject Admit Sexual Violence?: Between Sexual Violence and Masochism

Toshinari KAMBARA

Various forms of sexuality exist in contemporary society. It is often said that one is able to choose his or her own sexual identity, so long as it brings no harm to others. If this is the case, how should we consider "violent sexuality?"

First this paper focuses on masochistic sexual subject and self-defeating sexual relationship. Actually, some persons may have masochistic or self-defeating sexulity. But some of them compulsively suffer with such sexual orientaions. Probably, simply telling them to stop such self-defeating behavior may only act to exacerbate the problem.Yet, if we say "One selects one's own sexual identity or relationships, so there is no problem", we may admit the power and relationships which force one to live such self-defeating life. Admitting hurting oneself may follow admitting hurting someone else that defeat oneself. Therefore, we must look into the power structure which reproduces the cycle of self-defeating sexual relationships and sexual violence. For example, there are several discourses, which say "Victims want to be raped" or "Victims cause rapes." Such discourses admit sexual violence and force victims to suffer in silence.

Furthermore, how can we deal with the issue of sadistic sexual subject? Or, how can sadists live without hurting others? Or, how can those who want to rape others be satisfied without using sexual violence?

In this article, two cases are presented. One is a survivor of sexual assault. Attending self-help groups, she is recovering from self-defeating sexual addiction. The second is sado-masochist. Through therapy, he was learning to do without using violence. These cases show us very important issues. They learn to accept the existence of themselves through sympathetic communications. And they bring up their inner possibility to love themselves and eventually others through comprehending their own sexual subjects. Such a possibility may help to overcome the nihilism and sadism, which are the essence of modern society.